

表 3.1 文献リスト(1)

H14年度北由利断層活断層調査 文献リスト

No.	著者	発行年	文献タイトル	掲載誌 Vol.No.	頁	要旨(北由利断層関連)	発表形態	キーワード	カテゴリ
1	秋田大学地質調査班	1986	1983年日本海中部地震による地盤災害と表層地質	地質学論集Vol.27	237~256	日本海中部地震による被害は秋田臨海平野部の沖積層分布域に集中している。しかし、一様に分布するのではなく微地形に表されている表層地質との関連性を有している。	論文	地震災害、沖積層、微地形、液状化、地盤災害	地震
2	Awata, Y. and Kakimi, T.	1985	Quaternary tectonics and damaging earthquakes in northeast Honshu, Japan.	Earthq. Predict. Res., 3	231~251	東北日本における活断層の分布、特に日本海沿岸におけるM7以上の震源分布から空白域の存在を示し、近い将来の地震の発生を予見。	論文	テクトニクス、地震、震源、空白域、地震発生	テクトニクス
3	栗田泰夫	1988	東北日本弧中部内帯の短縮変動と太平洋プレートの運動	月刊地球、Vol.10, No.9	586~591	北由利断層群主部は地調5万分一図幅に基づく天徳寺層上部下限(約2Ma)の垂直変位量を1,900mと推定、これより活動開始時期を2.7Ma前、垂直変位速度を1.0m/kaと算定。	論文	北由利断層系、活断層、地震、第四紀、東北日本弧	テクトニクス
4	池田安隆、今泉俊文、東郷正美、平川一臣、宮内崇祐、佐藤比呂志 編	2002	第四紀逆断層アトラス	東京大学出版会	1~18	日本の主要逆断層帯の分布(1/5万)や性状を集約。解説編では逆断層システムの地下形状とスリップレート、第四紀逆断層帯の起源とテクトニックな背景等を最新データで説明。	書籍	逆断層、活断層、テクトニクス、第四紀、地下構造	テクトニクス
5	池原研、中嶋健、片山肇	1994	秋田西方表層堆積図(海洋地質図41)	地質調査所	図	海底の表層堆積物の採取や海底写真撮影、音波探査などにより、秋田沖の海底表層分布図を作成した。由利丘陵沖では沖合い数kmまでは砂質の沿岸堆積物、更に沖では泥質陸棚堆積物から構成される。	図幅	海底地質、表層地質、大陸棚、音波探査	海底地質
6	大沢あつし、高安泰助、池辺穰、藤岡一男	1977	本荘地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)	地質調査所	5~17、図	日本海沿岸沿いにほぼNS方向に走る数条の東から西へ衝上するほぼ平行した断層が北由利衝上断層群、過褶曲と関連して地質構造を複雑にしている。見掛変位量は1,000m以上。海岸線の成因に関連。	図幅	地質構造、秋田油田、第三系、地質図幅	地質構造
7	太田陽子、海津正倫、松島義章	1990	日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題 - 1980~1988における研究の展望 -	第四紀研究 Vol.29, No.1	31~47	完新世における海面の微変動について、太田(1981)に引き続き1980~1988の研究論文より検討している。鹿児島湾のような著しい隆起地域では6,000年前またはそれ以前に海面の高頂期が認められ、一方、東北地方などでは5,000~5,500年前頃に出現す東北日本内陸における主な起震断層・活動セグメントの特性を整理し、断層活動の規模や平均変位速度、再来間隔、第四紀後期の地殻歪み速度について述べている。	論文	海水準、完新世、海面変化、古環境	地形
8	大竹政和、平朝彦、太田陽子 編	2002	日本海東縁の活断層と地震テクトニクス	東京大学出版会	122~132	秋田西方の大陸棚および大陸斜面の音波探査により、地質構造の解析を実施。なお、沿岸海域は未実施。石油公団のマルチチャンネル地震探査断面も使用している。	書籍	テクトニクス、活断層、第四紀、東北日本弧、地下構造	テクトニクス
9	岡村行信、森尻理恵、佐藤幹夫	1996	秋田西方海底地質図(海洋地質図48)	地質調査所	図	秋田西方の大陸棚および大陸斜面の音波探査により、地質構造の解析を実施。なお、沿岸海域は未実施。石油公団のマルチチャンネル地震探査断面も使用している。	図幅	活断層、音波探査、海底地質、大陸棚、第四紀	海底地質
10	海上保安庁水路部	2002	沿岸海域海底活断層調査[秋田・本荘沖その1]	海上保安庁	1~54	秋田市から本荘市にかけての沖合い海域で音波探査を実施。由利丘陵の海岸線から3km程度の沿岸域は調査されていないが、その沖合い15km付近までには活断層は存在しないとされている。	報告書	活断層、音波探査、第四紀、海底地質、大陸棚	海底地質
11	核燃料サイクル開発機構	1999	わが国における高レベル放射性廃棄物地層処分技術的信頼性 - 地層処分研究開発第2次取りまとめ - 分冊1 わが国の地質環境	核燃料サイクル開発機構	-126~171	秋田平野の沈降は40~20万年以降1.0~1.3m/千年。2.5Maの地層はEL.500mに、1.5Maの地層は150mに位置する。	書籍	隆起量、海水準変動、長期安定性	地質環境
12	潟西層団体研究グループ	1983	男鹿半島東部潟西地域における潟西層	地球科学Vol.37, No.2	69~80	潟西層が分布する潟西面は標高40~60mを示し、温暖な気候下における高海面期に沿岸性堆積環境下で形成された。このような特性から潟西層は「下末吉層」に対比される。	論文	潟西層、第四系、下末吉期、段丘、間氷期	層序
13	活断層研究会	1991	[新編]日本の活断層	東京大学出版会	120~122	北由利断層は高角度で東に傾斜する逆断層で、長さ30km、確実度、活動度A、東側隆起の垂直変位は1,900m、平均変位速度1.0m/千年の伏在断層とされている。	書籍	リニアメント、活断層、第四紀断層	断層
14	鷹澤好博、Naomi Porat、荒屋純一、椎名孝	2001	広域風成塵堆積物のルミネセンス年代測定	地質学雑誌Vol.107, No.12	762~772	表層を覆う粘土や風成塵堆積物を対象に、光ブリーチによるTL/IRSL年代測定を実施したところ、約50kaまでの年代は予測年代とよく一致した。TLのAD法では120kaまでよく一致した。	論文	TL年代測定、更新世、ローム、風成塵堆積物	年代測定
15	小池一之、町田洋 編	2001	日本の海成段丘アトラス	東京大学出版会	日本 [北海道・東北]	全国の海成段丘のデータに加え、CD-ROMで当地域では雄物川、子吉川流域等の河成段丘および海岸近くの海成段丘の1/5万分布図・解説が収録されている。	書籍	海成段丘、テフロクロノロジー、地殻変動、旧汀線	地形
16	小松原琢	1999	伏在断層の地震危険度調査手法について	応用地質、Vol.40, No.2	66~69	伏在断層の活動による地殻変動の特徴を検討し、地表部の隆起帯の幅や変位量と断層上・下端深度、断層変位量等との関連を示した。	論文	伏在断層、活褶曲、地震危険度調査	テクトニクス
17	佐藤比呂志、池田安隆	1999	東北日本の地殻構造と伸張テクトニクス	月刊地球、号外No.27	135~141	東北日本における日本海形成期のテクトニクスとそのテクトニクスから推定される現在の活断層の深部形状について、東北合同観測によって明らかとなった地殻構造から言及。	論文	テクトニクス、活断層、日本海、屈折法探査、地殻構造	テクトニクス

表 3.1 文献リスト(2)

H14年度北由利断層活断層調査 文献リスト

No.	著者	発行年	文献タイトル	掲載誌 Vol.No.	頁	要旨(北由利断層関連)	発表形態	キーワード	カテゴリ
18	佐藤比呂志、伊藤谷生、池田安隆、平田直、今泉俊文、井川猛	2001	震源断層 - 活断層システムのイメージングの意義と現状	地学雑誌Vol.110, No.6	838 ~ 848	活断層 - 震源断層システムのイメージングの意義と重要性を概括し、反射法地震探査結果によって判明しつつある活断層 - 震源断層システムについての研究成果を紹介している。	論文	震源断層、活断層、内陸地震、反射法地震探査、テクトニクス	テクトニクス
19	佐藤任弘、茂木昭夫	1982	海底地形から見た日本海の海水準変化	第四紀研究Vol.21, No.3	203 ~ 210	海底の平坦面を比較し、最終間氷期以降の最大海水準低下期以降の海水準変化を解析。	論文	海底、海水準、大陸棚、沖積層	地形
20	佐藤芳和、板垣直俊	1982	子吉川流域の河岸段丘群	秋田地学No.33	1 ~ 8	本荘市内では高度30 ~ 40mの段丘等を船岡段丘とよび、上流域で比高が大きくなること、面の連続性が極めて良いのに対し堆積物が薄いことなどから低位段丘と考えている。	論文	河岸段丘、子吉川、第四系、地形面	地形
21	白石建雄、竹内貞子、林信太郎、林聖子	1988	秋田県男鹿半島で発見された始良Tn火山灰	第四紀研究、Vol.27, No.3	187 ~ 190	五里合西方で瀧西層を不整合で覆う堆積物があり、箱井層と呼ぶ。その底面のテフラを始良Tn火山灰と同定した。花粉組成は寒冷な気候を示す。	論文	火山灰、AT、第四系、層序、最終間氷期	テフラ
22	白石建雄	1990	秋田県八郎潟の完新世地史	地質学論集、No.3	47 ~ 69	八郎潟周辺の完新世地史を地形・地質、とくに完新世の砂丘堆積物の形成や海水準変動との係わりで考察している。砂丘の成立や完新統の堆積には第四紀地殻変動の影響が大きい。	論文	完新世、八郎潟、縄文海進、砂丘	層序
23	白石建雄・竹内貞子	1999	秋田県男鹿半島における上部更新統層序の再検討	第四紀研究、Vol.38, No.1	29 ~ 39	安田海岸大露頭は安田層と瀧西層に区分されていたが、この安田層は模式地である瀧西層の一部で、同層の沖浜堆積相であることが判明。安田砂部層と再定義。	論文	瀧西層、安田層、下末吉期、段丘、間氷期	層序
24	白石建雄	2000	秋田県男鹿半島における酸素同位体ステージ5aに対比される地層(五里合層; 新称)と海成段丘	第四紀研究Vol.32	1 ~ 10	広域テフラにより同位体ステージ5aに対比される五里合層の定義と海成段丘の存在を確認。男鹿半島の平均隆起速度は1.2m/kyr程度である。	論文	男鹿半島、隆起、テフラ、五里合層	層序
25	早田勉、八木浩司	1991	東北地方の第四紀テフラ研究	第四紀研究Vol.30, No.5	369 ~ 378	東北地方のテフロクロノロジーの研究について概観し、示準テフラの特徴を述べている。由利丘陵では十和田火山のTo aのほか、To-Cu(十和田 - 中郷テフラ)(約5,000 ~ 5,500BP)が降下したことが明らかになった。	論文	テフラ、第四紀、十和田、東北地方	テフラ
26	田中和弘	1993	電子スピン共鳴法による堆積物の年代測定 - 光ブリーチングの検討と風成層への適用	電力中央研究所・研究報告U93030	1 ~ 56	風成砂層中の石英粒子を対象に電子スピン共鳴法を適用し、年代測定を行った。得られた年代は地表下深度とともに増大し、地下2.3mで9万年の年代を得、TL年代測定結果とよい一致を見出した。	論文	電子スピン共鳴法、年代測定、光ブリーチング、レス	年代測定
27	富樫泰時	1975	菖蒲崎貝塚と秋田の貝塚	鶴舞 No.31	48 ~ 57	秋田県の貝塚の概要を説明。北由利断層近傍では子吉川と支流芋川の合流点標高1m前後に縄文早期の菖蒲崎貝塚があり、当時の汀線が現在より低い位置にあったと推定。	論文	貝塚、遺跡、縄文土器、貝層	遺跡
28	内藤博夫	1965	東北日本秋田県岩見川沿いの段丘地形	第四紀研究Vol.4	23 ~ 34	秋田県の岩見川沿いの段丘群の分布を明らかにし、区分した。由利丘陵地域は含まれていないが、対比対象の雄物川流域の中位段丘の形成に関する見解はNakata(1976)にも引用されている。	論文	第四紀、段丘、	地形
29	中川久夫、中馬教允、石田琢二、松山力、七崎修、生出慶司、大池昭二、高橋一	1972	十和田火山発達史概要	東北大地質古生物研邦報No.73	7 ~ 18	火山学会開催を機会に十和田火山の発達史を総括。降下火山灰は十和田湖を通る南北線よりほぼ東側に分布し、東方に比較的広角に開く扇形を呈する。また、傾斜25度内外以下の緩斜面上に堆積した。	論文	十和田火山、テフラ、発達史、第四紀	テフラ
30	Nakata Takashi	1976	Quaternary tectonic movements in central Tohoku district, Northeast Japan	東北大学理科報告第7輯Vol.26	213 ~ 239	東北地方の第四紀のテクトニクスを地形学的手法で検討。雄物川流域では段丘群を区分し、上流側40km間における段丘の比高差より活構造を指摘している。	論文	段丘、第四紀、テクトニクス、東北地方	テクトニクス
31	福留高明	1993	秋田県沿岸部における直下型地震と活断層	秋田大学地下資源研究彙報、1993	26 ~ 52	秋田県沿岸部の直下型地震について、近い将来の地震発生の可能性を検討。地震発生の空白域分布(AWATA1985)より、西傾斜の逆断層「秋田湾中央断層」の活動性を指摘している。	論文	活断層、テクトニクス、地震、空白域	地震
32	福留高明	1996	秋田の地震とテクトニクス	秋田大学公開講座「秋田の地震と活断層」第三回	48	古地震のマグニチュードと震源断層の推定を秋田近傍の地域を対象に検討。北由利関連では830年天長地震、1644年羽後本荘地震など。	資料	古地震、活断層、震源断層、津波、地震	地震
33	藤岡一男、大澤あつし、池辺穰	1976	羽後和田地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)	地質調査所	輯	日本海沿岸沿いにほぼNS方向に走る数条の東から西へ衝上する平行した断層が北由利衝上断層群、過褶曲と関連して地質構造を複雑にしている。見掛変位量は1,000m以上。断層群中の主断層は子吉川断層である。	図幅	地質構造、秋田油田、第三系、地質図幅	地質構造
34	藤岡一男、大澤あつし、高安泰助、池辺穰	1977	秋田地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)	地質調査所	10 ~ 25、図	日本海沿岸沿いにほぼNS方向に走る数条の東から西へ衝上する平行した断層が北由利衝上断層群、過褶曲と関連して地質構造を複雑にしている。本地域では地下に伏在。	図幅	地質構造、秋田油田、第三系、地質図幅	地質構造
35	町田洋、新井房夫、宮内崇祐、奥村晃史	1987	北日本を広く覆う洞爺火山灰	第四紀研究、Vol.26, No.2	129 ~ 145	Toyaは北日本地域を広く覆い、火山ガラスの低屈折率と高い屈折率の斜方輝石を含むという特徴がある。噴出年代は9 ~ 10万年前とされ、下末吉から小原台期の海成段丘の同定に有効である。	論文	テフラ、火山灰、北日本、洞爺、層序	テフラ

表 3.1 文献リスト(3)

H14年度北由利断層活断層調査 文献リスト

No.	著者	発行年	文献タイトル	掲載誌 Vol.No.	頁	要旨(北由利断層関連)	発表形態	キーワード	カテゴリ
36	的場保望	1992	秋田油田第三系層序に関する最近の変革	石油技術Vol.57, No.4	315 ~ 333	秋田油田地域の第三系の層序に見直しを行った。これは構造運動に伴う堆積場の変遷によるもので、秋田市周辺の船川層とか、男鹿半島の船川層など限定して用いる必要がある。	論文	第三系、秋田、油田、層序、有孔虫	層序
37	宮内崇裕	1988	東北日本北部における後期更新世海成面の対比と編年	地理学評論、Vol.61(Ser.A)No.5	404 ~ 422	指標テフラと褐色火山灰土堆積速度から高嶺面を最終間氷期最盛期(12~13万年前)とした。Toyalは9万年前と推定される。後期更新世には少なくとも4つの高海面期が推定される。	論文	テフラ、旧汀線、火山灰、更新世、海水面	地形

その他資料

- 1) 秋田県埋蔵文化財センター(2002)：菖蒲崎貝塚現地見学会資料2002.09.23
- 2) 秋田県芋川災害復旧事務所、株式会社協栄ボーリング(2002)：河川災害復旧関連緊急工事地質調査業務委託 報告書 平成14年1月
- 3) 秋田県埋蔵文化財センター、株式会社協栄ボーリング(2002)：菖蒲崎貝塚発掘調査に係わる地質調査業務委託 報告書 平成14年7月
- 4) 桑原啓三(1987)：第四紀断層の調査法、土木技術資料、Vol.29, No.6, pp.293-298
- 5) 天然ガス鉱業会・大陸棚石油開発協会(1992)：改訂版「日本の石油・天然ガス資源」
- 6) 石油公団(1988)；昭和62年度 国内石油・天然ガス基礎調査 海上基礎物理探査「西津軽～新潟沖」調査報告書、フィールドテープ、処理・解析関係資料
- 7) 石油公団(1989)；昭和63年度 国内石油・天然ガス基礎調査 海上基礎物理探査「秋田～青森浅海域」調査報告書、フィールドテープ、処理・解析関係資料
- 8) 石油公団(1990)；平成元年度 国内石油・天然ガス基礎調査 海上基礎物理探査「秋田～青森浅海域」調査報告書、フィールドテープ、処理・解析関係資料
- 9) 石油公団(1993)；平成4年度 国内石油・天然ガス基礎調査 陸上基礎物理探査「由利油帯～新波地域」調査報告書
- 10) 石油公団(1993)；平成4年度 国内石油・天然ガス基礎調査 基礎試錐「由利沖中部」調査報告書
- 12) 石油公団(1994)；平成5年度 国内石油・天然ガス基礎調査 基礎試錐「本荘沖」調査報告書
- 13) 石油公団(1996)；平成7年度 国内石油・天然ガス基礎調査 基礎試錐「子吉川沖」調査報告書